末永恵子（すえながけいこ）

学位の種類	博士（文学）
学位記番号	文博第52号
学位授与年月日	平成10年2月12日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当
研究科・専攻	東北大学大学院文学研究科（博士課程後期3年の課程） 国文学国語学日本思想史学専攻
学位論文題目	烏伝神道の基礎的研究
論文審査委員	（主査） 教授 玉懸博之　教授 吉田　忠 教授 華園聰麿 助教授 佐藤弘夫

論文内容の要旨

序

本論文は、幕末期に賀茂規清（1798〈寛政10〉～1861〈文久元〉年）によって創唱された烏伝神道の思想的特質と、その思想の同時代及び後世への受容について明らかにすることを課題としたものである。

烏伝神道の教祖、賀茂規清は、天保・弘化年間に江戸で神道講釈を行い、民衆に爆発的な人気を得たと言われている。だが、その布教活動は幕府の忌憚に触れる所となり、八丈島流刑に処せられ、その地で生涯を閉じている。まさに異端の神道家である。

ところで、従来の幕末期の神道思想研究では、尊皇攘夷運動や近代天皇制イデオロギーの支柱となった国体論や尊王論の思想的源流である後期水戸学と幕末国学とが、主たる対象となってきた。

この二大潮流の陰に覆われて、同時期の烏伝神道に関する研究は、決定的に立ちおくれている。その原因として考えられるのは、第一に、二大潮流に比して社会的影響力の点では劣るこ

とである。烏伝神道の場合、教祖が幕府権力の弾圧を受け、八丈島へ流謫となり同島にて死去することもあって、大きな教団が形成されるまでには至らなかった。

第二に、烏伝神道の思想としての画期性や問題性の見えにくさが挙げられる。烏伝神道の神道説には、牽強付会と言うレッテルが貼られていて、その付会の中味が立ち入り、著述の意図を汲み上るという内在的理解の段階に至っていなかった。恐らく、烏伝神道の著作は一見しただけでは、近世前期からの儒教的神道の焼き直しにしか映らず、そこに思想の「新しさ」を見出しにくかったのではないかと推測される。

筆者は、第一の烏伝神道マイナーの性格に対しては、次のように考える。弾圧を受けたために大きく表面化することはなかった思想の水脈を掘り起こすことが、二大思潮によって単線的に描かれがちな幕末の神道思想史のイメージを相対化することにつながるのではないか。即ち幕末の思想状況の多様性の一側面を明らかにすることで、後期水戸学や国学の位置づけも、烏伝神道の視点から逆照射できるのではないか。

第二に、烏伝神道の思想的意義についてであるが、烏伝神道は、近世前期の儒教的神道の単なる焼き直しやリバイバルでなく、幕末期固有の思想的課題を担って登場した思想である、と筆者は考える。この神道が、民衆に人気を得たその意義を考察する必要があるのではないか。烏伝神道を取り上げる著者のマクロな問題関心は、以上の二点にある。

烏伝神道に関する研究は、戦前においては、烏伝神道の中の教化論・経世論の側面が注目された。しかし、教義に関しては、奇異な神道説であり、信仰の面でも純粋でないという評価がなされ、その思想の内在的理解は進まなかった。しかし、戦後、神道思想を社会状況の中に位置づけ、その歴史的意義を考察する論考が現れてきた。幕末期に息づいた思想として社会との関連で分析され、民衆宗教としての烏伝神道像が描き始められてきたといえる。しかし、それらの研究のほとんどが、日本史の分野で実証的研究が進んでいる天保改革期に時期を限定したものとなっている。

このような研究状況をふまえて、筆者は、烏伝神道研究の問題点を次のように考える。

第一に、烏伝神道研究はいまだ研究蓄積が十分でなく、事実の積み重ねが必要な段階にある。特に遠島後の著書の分析がほとんどなく、研究史には偏りがみられる。規清説のトータルな把握、即ち烏伝神道の基礎的かつ体系的研究がなにより必要とされているのである。

第二に、規清の思想の変化の問題がある。従来の研究では、一部の著述の分析を通して思想の特徴が把握されてきたが、規清の29年間の思想的営為の中では、思想的展開が認められるテーマが存在する。思想内容の変化とその要因を解明する必要がある

第三に規清の思想の、同時代および後世への受容の問題である。この問題は思想を社会的に位置づけるのに必要なだけでなく、その思想的特質を逆照射するうえで不可欠な問題といえる。

が今日、規清の道統が存続していないこともあってか、全く手つかずの状態にある。まさに史料の発掘から始めなければならない問題なのである。

上記の３つの問題点を踏まえて、２つの課題と分析視角を設定することとしたい。

第一の課題。烏伝神道に関する基礎的な考察を行なうことによって、その体系的かつ構造的把握を試みることである。その分析にあたって、規清の思想の諸側面のうち、(1)『日本書紀』神代巻解釈、(2)コスモロジー（＝宇宙生成論）、(3)民族信仰、(4)死生観、(5)国家祭祀構想、という規清の思想における大きな柱である５つの側面を取り上げたい。この５点は、幕末期の神道が、人々の探求心や求道心、あるいは死後の不安に応えるために課された課題であった。その課題とは、時代に即した世界観・人生観・死生観をどのように構築するかであり、それと関係して記紀に代表される神道古典をどのように解釈するか、また社会をいかに変革するかである。烏伝神道は既にこれらの課題に対して、独自の教義の体系化を行っていたといえる。烏伝神道が提出した解答の内容について、その思想の内在的理解を行い、思想的課題と思想的特質を解明することを目指したい。

第二の課題。先の基礎的分析を前提に、規清説の、同時代および後世への受容について分析を行うことである。規清との邂逅や著述を通してその思想に触れた人物が記した見解を集めて検討し、規清説の受容について、その性格を抽出することとしたい。

即ち、本論文では、烏伝神道の思想に関する基礎的な考察を行い、思想の受容の問題を分析することを通して、その思想の特質を解明することを目的とする。

第一編　烏伝神道の思想

第一編では、烏伝神道の教説のトータルな把握を目指して、規清説の諸側面を理解し、規清が何を思想的課題として、いかなる解答を提出したのかを明らかにしようとした。

第一章「烏伝神道の『日本書紀』神代巻解釈」では、神道の根本課題である神代巻解釈について考察した。従来、奇異な解釈であって学問的でないと一蹴されていた規清の神代巻解釈を分析し、解釈史上に位置づけることによって、再評価を行おうとしたものである。神代巻は、中世以来儒教や仏教の理念で解釈されてきたが、その流れの中に烏伝神道の神代巻解釈を置き、他の神代巻解釈との比較を行った。さらに時間的に解釈史を遡るだけではなく、同時期の「国学」の解釈との比較を通して、その独自性を見出そうと試みた。

神代巻解釈の分析からは、以下のことが明らかになった。規清は、神代巻の神々の実在性を否定し、「理」や「心法」のシンボルであるとした。そうすることで、神代巻を「修身斉家治国平天下」の普遍的で合理的な世界像を描こうとしたことが明らかになった。近世前期の儒家神道の神代巻解釈では、儒教理念の付会が神代巻の部分ごとに行われていたが、規清の解釈は、

そのような段階を越えて、神代巻をひとつのまとまったストーリーとして徹底的に読み込んだところに特徴がある。このような解釈の成立は、特殊日本的、非合理的神概念を背景に、神代巻を字義そのままに解釈する「国学」との対峙を契機としていたことを明らかにした。

第二章「烏伝神道のコスモロジー」では、烏伝神道のコスモロジー（＝宇宙生成論）をとりあげた。コスモロジーは、基本的に人間の倫理道徳や生死といった問題と有機的に関連して構成されている。幕末期、国学や民衆宗教が独自のコスモロジーを新たに形成するが、これら他のコスモロジーとの比較を通して烏伝神道のそれを同時代の思想状況の中に位置づけようと試みるものである。

規清の描くコスモロジーは1848（嘉永元）年を画期として変化を見せている。前期のコスモロジーの主眼が、天と人体の一致を説くことにあるのに対し、後期では天と心の一致を主張することが主眼となっていた。後期のコスモロジーにおいては、天に「冷際天」が設定され、人間の心の根拠となり、心は天に根拠を得て無限の能力が付与され、神秘的な現象の要因とされるようになったのであった。規清のコスモロジーの特徴は、天人一致を基本的な枠組みとして、天と人との原理一致を徹底化させ、神秘的現象を含むあらゆる事象に、統一的原理（生成原理、「感」の原理）を貫徹させたことにある。人間の死もこの原理の例外ではなく、死は消滅にすぎないと言い切っている。このような死後の彼岸的場を設定しないコスモロジーは、他の神道・国学がこぞって死後の世界を構想し、救済の場を設定した当時の思潮にあっては、極めて特異な位置を占めているといえる。

第三章「烏伝神殿と民族信仰」では、烏伝神道が、流行神・神憑り・託宣といった近世後期に特徴的な民族信仰をどのように受けとめ、いかに対応したのかを考察した。烏伝神道は、人間の「心」の尊厳性を説いて呪術を否定する方向性を持っているが、民族信仰の神秘的な諸現象に、いかなる論理を以て対応したのかを明らかにし、同時期の民族的世界をめぐる諸言説の中に位置つげる試みである。

人間の心に天の「感」が内在すると捉え、心の尊厳性・神性を主張した規清は、民族的世界の神秘的諸現象を心の「感」の作用、あるいは心と天地との感応に起因する作用であると説いた。したがって、神秘的に見える現象も「理」の範疇にある現象であるとする。

規清は、民族的世界を一貫した原理＝「感」でもっていったん解体し、神秘と映る現象を心の作用として再編成することで、民族的世界の呪術の主宰を排除し、自己の「心」を信頼する自立的生活へと人びとを方向付けようとしたのである。

第４章「烏伝神道の死生観」では、烏伝神道が「死」の問題について、いかに対応したのかを分析した。

1860年（万延元）年、規清の死生観は、死後のあり方に関して、死後は無であるという禅的な自力救済論から、死後は「忠臣ノ念」が天に止まるという「留魂」の思想へと180度転回している。この転回にょって、「忠臣」は死後も神となって現世に関与できることになり、人々の霊魂の安心は確保されたと評価できる。規清が、死後の魂の救済を思想的課題として引き受けたところに、この死生観の転回の要因があると考えられる。

第５章「烏伝神道の国家祭祀構想」では、規清の国家祭祀構想をとりあげ、祭祀構想が希求する社会秩序がいかなるものであったのかを、明らかにすることを試みた。

規清は、1843（天保14）年と1846（弘化３）年に性格の異なる二つの国家祭祀構想を著している。天保14年の構想の第一の特徴は、忠孝の士を顕彰するための巨大な築山「忠孝山」を設置し、景勝地として演出することで「諸人挙で参詣」する場を創出したことがある。その際、山頂には、朝廷と幕府の祖先神と臣下の神々が共に祭られ、朝幕協調の関係を示していた。しかも、その山の中腹には、身分秩序の序列にしたがって忠孝の士の碑が配列され秩序認識を示すものとなっていた。第二の特徴は、その建造物の建設段階で庶民の自発的な参加を期待し、そのエネルギーを吸い上げようとしたことである。第三の特徴は、建造物の埰に広大な墓地を造ることで、墓地不足問題を解決し、さらに庶民の無縁仏を解消すべく、町共同体で死後祭祀が出来るよう意図したことである。この構想は、庶民が名所に遊ぶ楽しみや、宗教的エネルギーや、家の存続が不可能で無縁仏となる不安などを踏まえたものとなっている。庶民の感情やエネルギーをも搦めとり、忠孝を最高とする価値体系へと収斂させた点に規清のこの時期の祭祀構想の特徴があった。

ところが、弘化三年段階の規清の国家祭祀構想は、武家から公家中心への政治体制の変革を前提とした抜本的宗教改革の柱として位置づけられている。宗教改革とは神祇官の再興と寺社改革を行い、神道を国教化することである。その国家祭祀に関しては、忠孝の士を祭った築山「香山」が庶民向けに建造され、皇室の神々は「香山」から除かれて、天皇廟たる伊勢神宮に祭られることになった。さらに、「香山」の山頂からは、幕府方の神々は消えている。これは、恐らく規清において、もはや幕府の権威は失墜し、神格化する意味が見出されなかったためであろう。この祭祀構想を軸とした宗教改革は、対外的危機意識のもと、キリスト教に対抗しうる国教を創出するための試みであったといえる。

補論「幕末の宗教裁判における正統と異端－『梅辻飛騨裁許書』の分析を通して－」では、規清の八丈島流謫の判決の「罪状」を検討し、何を基準にどのような観点から烏伝神道は異端とされたのかを分析した。

その結果、吉川神道方の吟味によって異端説とされたその思想的内容は、呪術の否定、神代巻観、神観念の三点であることが明らかになった。これらは、規清の神道説の特徴そのものを示すものだと言える。即ち、規清は(1)神道の祈祷や霊験を否定したこと。(2)神代巻解釈において道徳を付会したこと。したがって、(3)神話の神々に道徳や教訓を付会して勝手に意味づけたことである。この三点は、吉川神道方が示す「正統」とは正反対に位置した。つまりこの場合「正統」は、呪術に関しては、神道の祈祷や霊験の効果を認めており、呪術を認める立場をとっていた。神代巻については事実を描いた書であるとし、神代巻に登場する神々は実在したと解釈したのである。このような神道方の答申を経て、規清の罪状は、第一に上賀茂社の神職身分を逸脱した行動をとったこと、第二に神道説が異端であること、第三に政治批判を行ったことがあげられる。「天人唯一」の世界観・人間観に基づいた規清の神代巻解釈の意図は、「合理」的な認識を示すことで、民衆の道徳的主体の形成に資することにあった。このような意図から導き出された神道説であっても、吉川神道方の「正統」からは、異端とされたのであった。

第二編では、烏伝神道の受容の問題について、三つの角度から考察をおこなった。

第一章「烏伝神道の大関増業」では、近世におけるの受容の一例として、もと野州黒羽藩主で規清の門人である大席増業（1872〈天明２〉～1845〈弘化２〉年）における烏伝神道の受容について、増業の著述を分析することによって考察した。増業は、規清の主張の中でも、天人唯一を前提とした神代巻解釈に特に共感を示し、日本の道＝神道の優越性の根拠をそこに読みとっていたことが明らかになった。

第二章「烏伝神道の神習教」では、烏伝神道の神道思想が、近代においていかに受容されたのかを考察した。1883（明治16）年段階では、烏伝神道の道統が、教派神道のひとつ神習教の分教会、二葉協会において存続していたことが確認できる。二葉教会の出版物で規清の著述を改編した書物『生魂御料神供次第記』を、原著と比較することによって、教派神道傘下で存続していた神道の思想的特質を探り、近代における受容のあり方を秋からにする試みである。

考察の結果、この『生魂御料神供次第記』においては、規清の神観念の本質－神を徹底的に天道の活用と見る－は除去され、天照大神・現人神天皇・造化三神など、人格性・実在性を帯びた主宰神が崇敬の対象として編入されていた。このことは、規清の神観念が国教的神道体制の神観念とは相入れるものではなかったことを示している。このため、体制外の神観念は巧妙に捨象された上で、烏伝神道は受容されたことになる。

国家神道の公定教理の神観念は、一定の神秘性（人格性・実在性）を保持しつつ、一方で公定教理以外の民俗信仰を呪術として排斥する傾向をもつ。その点で、規清の唱えた呪術の否定

は利用価値があった。と、同時に神道的立場からの通俗的道徳の励行および現世秩序の絶対肯定という側面は、神道国教化策に適合的な主張であったと言える。規清の著作は、通俗道徳を神道的に意味付けたテキストとして換骨奪胎して教化に使用されていた。

第三章「烏伝神道と菅野八郎」では、近世と近代にまたがる思想の受容例として、民衆運動の指導者、菅野八郎（1813〈文化10〉～1888〈明治21〉年）の思想をとりあげた。従来、彼の明治期以降の著述は十分な検討がなされることがなかったが、実は彼は、維新期の政治構成の変化や海外文化の流入などの社会的激変の時期を身を以て体験し、それに基づいて思想的営為を行っていたのである。その中で注目すべきは、菅野の視点から明治政府批判を行った1874（明治15）年の『真造弁』という著述である。その批判点のひとつは、明治政府の導入した改暦にあったが、その批判の根拠には、規清から得た天文に関する思想があった。『真造弁』の分析を通して、菅野の規清の天文に関する思想の受容状況を明らかにする試みである。

分析の結果、菅野は天文説の(1)「宇宙生成と人体の生成における理の一致」を説いた天動説と(2)天譴災異説－天は人間の行為に応じて天災および禍福を与える－のふたつの側面を受容し、それに依拠して、明治政府の「啓蒙主義」を批判していたことが明らかになった。

結語

以上の分析から、本論文の立てた二つの課題に対して、以下の見解を導き出すことができる。

第一の課題は、烏伝神道の体系と構造について、特に(1)『日本書紀』神代巻解釈、(2)コスモロジー（＝宇宙生成論）、(3)民俗信仰、(4)死生観、(5)国家祭祀構想の５点を中心に考察することであった。

規清の世界観は、基本的には「天人唯一」と言うことである。天保期と嘉永元年以降とでは天と人との原理的一致を説く際に、天と身体との一致を主として説くか、天と心との一致を強調するかで比重の置き方は変化していたが、いずれにせよ、人間の心身の尊貴性が天に根拠づけられていた。宇宙の生成や構造も人体を根拠に想起されていた。故に天の運行即ち自然と人間の営みは同一原理上にある。したがって自然界において生々消滅がくり返されるように、人間の死も無に帰することであるとして、論理的に一貫したものとなっていた。（最晩年の死生観の転回までは）。この世界には「理」が貫徹しており、非合理は存在しないという前提に立って、民俗信仰の神秘現象は、その発生メカニズムを「心」の「感」の作用であと説明付けられ脱神秘化が図られていた。

また、神代巻の神々も実在するのではなく、「理ヲ求タル神号」とされ、人間の発生と関わられて論じられたり、天皇家の始祖の一代記の中に組み込まれて解釈された。即ち規清の「合

理」的な見地から対象をコロズ化することで、対象を「理」の範疇に属させ、「合理」的なものとして捉えなおしたのである。このように、烏伝神道は独自の世界観・人間観・死生観の体系を背景に、眼前の民俗的世界の再編や神代巻解釈に取り組んだ思想であると捉え得るのである。

このような思想的営為の課題とは、一言で言えば各自が呪術に惑わず、自立的に生活し、道徳を実践すべきことを教化することにあった。国家祭祀構想もあるべき道徳主体の形成ということに関わってくる問題である。

烏伝神道の思想の特質は、「合理」主義、即ち神秘ではなく「理」が世界を貫いているという主張にある。「合理」的認識が、道徳的主体の成立に不可欠な条件であると言う見解である。そしてその「合理」的認識の確立を、具体的な事物や現象を解釈することを通じて徹底的に推し進めようとした点が特徴的であると言えよう。

規清の「合理」主義は、幕末の国内的・対外的危機意識のもとで、道徳のあり方を示し、あるべき秩序形成への精神的変革をめざす思想として捉えられる。

第二の課題は、規清の思想の、同時代および後世への受容について分析をおこない、烏伝神道の受容のあり方と変容の性格を抽出することであった。

賀茂規清と同時代を生きた大関増業は、烏伝神道が普遍的な「天人唯一の理」を説いてた点を特に重要視し、神道の三教における優越性を示す根拠として受容していた。規清説のほぼ忠実な受容のあり方と思われる。

一方、近代の神習教二葉教会においては、規清説の「合理」主義にわる神代巻解釈は採用されず、その非人格的神観念は大幅に改編を受け、人間の魂を主宰する実在的神観念に変容していた。そこにおいては、規清説の四つの側面－呪術の否定、通俗的道徳の励行、現世秩序の絶対肯定、仏教の排斥－が継承されていた。いわば理論部分は無視され、実践的な側面が受容されたといえよう。

三番目の菅野八郎が規清より受容したのは、神道説ではなく、「天人唯一」を基礎とした天文説であった。この事実は、規清の思想が神振興の側面を除去しても、世界観としては十分成立しえたことを立証している。

以上三つの事例は、受容の多様なあり方を示しており、受容全体に共通する性格を抽出することは難しい。このことは、むしろ規清の思想の多様な側面を反映していると思われる。

最後に、本論文の残された大きな課題について述べておきたい。それは、賀茂規清は、何に依拠して神道説を構築していったのか、という問題である。規清は記述の典拠を示していない場合が多く、そのことが烏伝神道を性格に思想上に位置づける際のネックとなってきた。その克服には、規清以前の文献との関連を追求する必要があると考えている。

末尾に、付録として烏伝神道関係書がまとまって収められている、東北大学附属図書館狩野文庫蔵『瑞烏園叢書』の解題を記した。

論文審査結果の要旨

本論文は、「序」・第一編（合わせて五章）・第二編（合わせて三章）及び「結語」からなる。

「序」で論者は、烏伝神道（賀茂規清の創唱した神道）の研究史の問題点を指摘した上で、本論文の課題を設定する。

第一編「烏伝神道の思想」では、規清の神道思想を内側から構造的かつ体系的に把えようとする。第1章「烏伝神道の『日本書紀』神代巻解釈」では、規清は「天地の活用」をそのままに神とみなす（天・地・人に外在する神を認めない）神観念に立って、神代巻は①人が人たるふさわしい心身を獲得する過程と②天皇家の祖先たちが道徳的・政治的規範を樹立するさまを説きあかしたものだとの新解釈を打ち出した、とした上、神代巻から神秘的要素を除去しようとした規清のこの解釈は、神秘的神観念に立って神代巻の神々の営為に関する記述をそのままに事実とみなす、宣長系の国学と対峙的関係にある、と論ずる。

第2章「烏伝神道のコスモロジー」では、規清のコスモロジー（宇宙生成論）の特徴が天と人との原理的一致を独自の仕方で説く天人一致の主張にあるとした上で、この天人一致の主張が、嘉永元（1848）年以前では天と人体との一致の形で示され、嘉永元年以後では天と人の心との一致の形で示される、とし、加えて嘉永元年以後では、人が死後の世界を想定せずに自らの心（天と一致するもの）を拠り所にしてこの世を生き抜くべきことが説かれる、とする。

第3章「烏伝神道と民俗信仰」では、はやり神・神憑・託宣などの江戸後期に盛行した民俗信仰への規清の対応を考察し、①規清は、天と人それぞれの本質を「感」（理の極まれるもの）に見出しつつ、人の心の尊厳性と神性を主張した、②そして民俗的世界の神秘的諸現象を心の「感」の作用に起因するもの＝理の範疇に属するものと把えきった、③、①②に基づき人々が呪術や怪異現象に左右されずにそれぞれの心を信頼しつつ自立的生活を営むべきことを説いた、と論ずる。

第4章「烏伝神道の死生観」では、規清の死生観が、万延元（1860）年以前の、死後の世界は存在しない、人は心の神性を自覚してこの世を生き抜くほかはないとする禅的生観から、万延元年後の、死後の世界を想定し、「忠臣の念」が死後天に止まってこの世に関与する、という説を含んだ死生観へと変容した事実を指摘する。

第５章「烏伝神道の国家祭祀構想」では、規清が天保14（1843）年に巨大な築山を設定して天皇家や徳川家の祖先をはじめ忠孝の士を国家が祭ることを提唱した事実、弘化３（1846）年には天皇中心の政治体制論を前提にしつつ、神祇官の再興、神道の国教化、新たな築山の設置等からなる国家祭祀の実施を提唱した事実を記す。

補論「幕末の宗教裁判における正統と異端－『梅辻飛騨裁許書』の分析を通して－」では、規清の神道が幕府によって異端とされた所以が、神観念・神代巻観・呪術観の三点であった事実を具体的に指摘している。

以上の５章と補論で論者は、それぞれに研究史上まったく新たな指摘をなしており、もって宣長系国学の神道思想の対照的な、規清独自の「合理的」神道思想を内側から構造的・体系的にとらえることに成功している。

第２編「烏伝神道の受容」では、規清の神道思想の同時代及び後代における受容を追求する。第１章「烏伝神道と大関増業」では、下野国黒羽藩主で規清の門人であった大関増業が、独特の天人一致説にたつ規清の神代巻解釈に強く共感し、その見地に立って神道＝日本の道の優越性を主張していたことを指摘する。

第２章「烏伝神道と神習教」では、明治16（1883）年の時点で、教派神道の一つである神習教の分教会＝二葉教会が、規清の神道説の、現世の通俗道徳の重視や呪術の否定の面を継承しつつその教理を形成していたことを指摘する。

第３章「烏伝神道と菅野八郎」では、幕末－明治初期の民衆運動の指導者・菅野八郎が、明治初期に規清の天文学説のある面を継承しつつ、明治政府の欧化政策を批判する思想を形成していた事実を指摘する。

以上の３章とも、まったく新しい指摘であって、研究史上の価値がきわめて高い。

「結語」では、第１編・第２編の記述をまとめながら、論者の将来の研究の展望をのべている。

総じて本論文は、幕末の神道家・賀茂規清の神道思想の構造的特質や同時代及び後代への影響を、史料を博捜し、それに精密な考察を加えることにより、的確に把握している。この点は、研究史上論者によってはじめてなされたことである。こ成果は、幕末神道だけではなく近世神道の研究の進展に寄与するところきわめて大である。

よって本論文の提出者は、博士（文学）の学位を授与されるに十分な資格を有するものと認められる。